

保護者向け校長室だよりNO.1 R3 4/17(土)

## 「平庭の麓から」

文責：久慈市立山形小学校 校長 角谷 隆章

学校+保護者+地域=子どもの健やかな成長

「学び高め合う子」、「心豊かな子」、

「強くたくましい子」の育成をめざして

### 【不定期ですが発行します】

私事、この4月で教師生活31年目に入りました。うち29年間は中学校勤務。小学校は、本校が初めてでやっと初心者マークがとれたところです。

さて、校種に限らず、子どもの健やかな成長のためには、学校と保護者の連携が欠かせません。しかしながら、新型コロナウイルスの影響でその関りが制限されて1年が経ちます。今年度も依然として終息の糸口がみえていません。そのような中、「学校だより(山形小)」や「学級通信」とは別に、教育に関わる情報を保護者の皆様に提供しようと思いついたのが、保護者向け校長室だより「平庭の麓から」です。本校の校長室は“角部屋”で、平庭から吹き降ろす風がピーヒャララ〜♪とまるで縦笛を演奏しているかのように耳に響きます。今の季節は、後をみると、澄んだ青空をバックに緑になりかけの草木が眩いばかりに目に飛び込んできます。そんな校長室から、私のこれまでの経験や新しい教育情報等、ジャンルを問わず発信したいと思います。

不定期での発行です。保護者の皆様も気楽にお付き合いいただければと思います。本来なら、PTAの会合や懇親会で直接話すようなことも、このご時世、なかなかできませんので、文字にして発信します。もし、子育てで何らかの参考になることがあれば、幸いです。よろしく願いいたします。

### 【親の役割ってなんだろう？】

第一回目は、「親の役割ってなんだろう？」。エッセイストの市田ひろみさん(1932年7月生まれ)が書いた「ありがとうを言える人、いえない人」の一節を引き合いに、かつて、学年主任をしていた頃、年度当初の学年PTAの懇談会で話したことです。中学生の親向けに話したのですが、もちろん小学生の親にも当てはまることだと思えます。

子供の病気やけが。学校の成績や人間関係。親はいつも我がことのように苦しむ。病気やけがなどはすぐに行動できるが、子供が敗者になっている時、親は何をすればいいのだろう。子供の心の闇や苦悩に親はどうかかわってあげよいか。親はかけることばを探しめぐねて、口を閉ざすのだ。子供が苦しんでいる時は、親も苦しんでいるのだ。子供の周囲にはいろいろな敵がいる。まわりの大人や子供、悪い遊びの誘惑やいじめ。子供は自分の短い人生経験の中から、何とかして保身を探ろうとする。しかし、あるものはキレ、あるものは怒り狂い、暴力をふるう。一番の敵はうちなる敵、自分自身だ。自分の心の中にいる敵を抑えられないのだ。必要なのは耐えること。忍耐だ。

ある親は子供がほしいものを与え、悪いことをしてもしからぬ。こんな親に育てられた子供は、善悪の区別がつかない子に育つ。親の役目は、よいことと悪いことを教えることだ。

私自身、明治の親に育てられたから、「また同じことを言うてる、うるさいなあ」と思ったものだ。しかし親

の言葉は、しっかり血や肉にしみこんでいる。私が大きなあやまちをせず、生きてこられたのは、親のうるさい言葉のおかげだった。親は子供が成人して社会に出た時に、恥をかかずに生きられるように教えて育てるのだ。

うそついたらあかん

弱いもんいじめたらあかん

恩忘れたらあかん

いばつたらあかん

人のもの盗ったらあかん

泣いたらあかん

負けたらあかん

感謝せなあかん

返事は聞こえるようにせなあかん

遅刻したらあかん

挨拶せなあかん

未成年の間は、親や先生がかばってくれるとしても、成人して社会で生きる時、親や先生はついてきてくれない。

親は悲しいものだ。子供に嫌われても、理解されなくても、子供を育てるのだ。親にとって子はいとしいもの。＜プラスとマイナスのピグマリオン効果＞いくつになっても、親は子のことを心配する。そんな愛情がわかるのは自分が子の親になった時だ。

人間はいつも一人で生きていく力をたくわえておかなければならない。それこそ少年期にその力が蓄えられるのだ。がまんすることを教えるのは親だ。社会生活の中で、ひとこと多く言ってしまって味方を失うこともあれば、そのひとことを飲み込んだおかげで、味方が増えることもある。言いたい放題、やりたい放題では、人間関係がうまくいかないばかりか、本人の人生も破滅的になる。がまんできる人間に育てるのは親の

義務だが、もちろん、親にその責任のすべてがあるわけではない。家庭の躰（しつけ）が問われている今日、親は子にいろんな期待をかけると思うが、人生でいちばん大切なことはふたつだと思う。

挨拶のできない人がいるが、本人が損をしていることに気づいていない人が多い。

○挨拶ができる人 ○時間が守れる人

これは、成人してから言おうと思っても出てこない。子供の頃のしつけだ。時間が守れる人。いつも遅刻してくる人は人に

・おはようございます ・こんにちは ・こんばんは ・すみません ・ありがとう ・お疲れ様です

好かれないし、仕事のチャンスも逃す。これも成人してから気をつけようと思っても体が言うことをきかない。学校でいつも遅刻していた人は、社会に出てもすぐにはなおらない。誰だって朝は眠い。寒い冬はふとんの中になりたい。しかし、強い意志のある人は起きられるのだ。社会に出れば、仕事をするにも強い意志が必要だ。朝起きられない人間がどれほど信頼を得られるか。親は子をたたき起こす勇気をもってほしい。子を不幸にしようと思っている親はいない。しかし、自信のなさのせいで叱ることをさけようとする。子供は、本能のままに生きようとする。親は、愛があれば子供を叱ればいい。今は親が自信を失っている。母は受胎した時から我が子に責任が生ずる。親はかけがえのないもの。親に対する感謝や親の愛がわかるのは、ずっとあとかもしれない。でも親は懸命に子供を育てたことでその役割を果たすのだ。子に嫌われたってその役割を果たす勇気をもってほしい。

この書籍は2001年発行ですので、かれこれ20年前のものです。しかし、今でも、頷けることが多くあるのではないのでしょうか。「不易と流行」。人生を充実させるためには、不易の部分を疎かにはできないと考えています。